

2026年 いざ世界遺産登録へ！

「飛鳥・藤原の宮都」の構成資産を紹介します

●川原寺跡（かわらでらあと）

川原寺建立以前の寺院が朝鮮半島の影響を色濃く示す一方、川原寺は中国（唐）の影響を示す点が特徴です。

伽藍の造成には唐尺を採用するとともに、一塔二金堂式という特異な伽藍配置をしています。また、飛鳥宮の方向にある東門は伽藍正面の南門よりも大きく造られており、飛鳥宮を強く意識していたことが分かります。

堂内は博仏で装飾されたほか、創建時に使用された瓦の文様は唐の影響を受けたもので、その後寺院や宮殿で主流となりました。

川原寺は、天皇家の私的寺院として創建され、後に国家寺院に位置付けられており、国家寺院が成立する過程を示す仏教寺院の遺跡です。



▲創建当初の伽藍配置
(提供：奈良文化財研究所)



▲複弁八弁蓮華文軒丸瓦と
軒平瓦
(川原寺出土)
(提供：奈良文化財研究所)



▲博仏
(川原寺裏山遺跡出土)
(提供：奈良文化財研究所)

●檜隈寺跡（ひのくまでらあと）

日本で仏教が受け入れられ寺院の造営が奨励された時代、東アジアとの技術・文化の交流の中で渡来した氏族が、自身の拠点である檜隈の地に氏寺として建立しました。出土瓦から、金堂と西門は7世紀後半、塔と講堂は7世紀末に建てられたと考えられています。

伽藍は地形に合わせて南西方面を正面とし、中央の塔を挟んで南東に金堂・北西に講堂を配した独特な配置をしています。

このような方位に沿わない伽藍配置は、百済の宮都周辺の仏教寺院と類似しています。また、講堂の基壇には、瓦が積まれており、これは百済の寺院で多く用いられていた技法です。

これらのことから、檜隈寺跡は、百済から多くの技術者が渡来していたことを現在に伝えていることが分かります。



▲単弁蓮華文軒丸瓦
(檜隈寺出土)
(提供：奈良文化財研究所)



▲講堂跡
(提供：奈良文化財研究所)



▲講堂瓦積基壇
(提供：奈良文化財研究所)